紹介

京都市史編年綱目第一巻

京都市史編纂の計畫せられて以來、多數の學徒を擁して、長時日を費して事に當れる事情を聞くにつけても、その業績相ついで擧がりつゝあることを思はせたが、今度その最初の成果として、編年綱目第一巻が印刷に附せられ、一讀の機に惠まれた。收むるところ、神代より、康保四年　村上天皇崩御に至る間において、京都市に關係ある事柄を採り、更に市民生活と關係ある市周邊の事項に及ぶのであつて、體裁は、毎條の首に綱文を揭げ、次いで典據となれる史料の重要なるものを錄してゐる。その編纂趣旨は、例言によれば、本編の記述と相俟つて市の沿革を明らかならしむるものゝごとくである。斯かる企畫は、地方史の一般形式が、資料を內容に從ひ分かち、別に年表を編めるに對し、兩者を兼ねて而も新しい意義を具へたものとして注目すべきであらう。

編年綱目の形態のもつ意味について考へられることの一は、本編よりして、讀者は述者の意圖に導かれ教へられるところ多くあるに對し、この者にあつては、讀者自らの關心に從ひ歷史を組み立てる機會を與へられることである。即ち兩形態が讀者に對する働きには異なるものあり、後者は單に前者の補助的性質に止まるものではない。讀者はこの者において、自己の立場により市史を理解し、更に本編の叙述により教へられるところ多きを期待し得るであらう。

而も、綱目の序列の裡にも、編者の意圖の示されるところはある。本市が日本歷史展開の上にあつて中心的地位を占めた事情より、本書に收載せられた事項の選擇には、國史全體と關聯しつゝなほ市史としての獨自なる推移を示さうとする用意があり、夥しい資料の中より斯く要を盡してまとめた編者の苦心を察せしめるものがある。

更にその用意は、特殊の現はれとして、克明に附せられた頭註の記載にも窺はれる。頭註はそれによつて資料の重點を示し、本編の內容をも推察せしめる働きをもつ。本書における記載樣式がおほむね固有名詞の摘出に止まるは、檢索上の便宜を主とするによるかとも思はれるが、本市に關係ある事項は細大洩らすことなく網羅して、斷片的資料のうちにも市の沿革を辿らうとする周到の配慮あるを多とするのである。

本文七五〇頁、外に別刷圖版七葉を附し、時局下稀に見る堂々たる裝幀は、優れた內容に錦上花を添へるものと云へよう。國史への反省最も強く要請されるとき、その中核的存在たる本市史の編纂が、國運の隆昌に貢獻するところ極めて多きものあることを思ひ、その第一としての本書出版の盛擧を祝し、嗣出を期待して蕪辭をつくれる次第である。（京都市發行　非賣品）（藤　直幹）

清朝史通論

內藤虎次郎著

本書は内藤博士が清朝一代を通論せられたる古典的名講『清朝史通論』と『清朝衰亡論』との二篇を、内藤乾吉・鷲淵一兩氏に依て校訂編纂せられたるものであつて、斯く一書に纏められて更に良く清朝の歴史的性格を一貫展示せしめて餘す所無く、兩篇相俟つて本書の清朝史に占むる「古典」的地位の一層確然たるものがある。以下些か本書兩篇の一貫的概要を試みてみよう。

「清朝時代は帝王の絶對獨裁專制政治の最も昂揚せられし時代なるが故に――「清朝の政治といふものは殆んど帝王の外に無いと云つてもよく、」從つて帝王の個人的性格・趣味・志向が最も端的に政治面に反映せし時代であつた。が、幸にも清朝の「非立太子政策」が諸王子に王位繼承の可能性と希望とを與へ、之が諸王子の勉學修身への專心沒入を動機づけ、從つて諸王子の中の最も優れたる一人によつて繼承せられたる王位には三百年間殆んど常に英主名君を見出し得たのであつて、之が內治に於ては所謂清朝的「善政」の基礎を爲せるものであり、(第一講・帝王及び內治)この主權者の個人的倫理性が又、支那周邊諸民族の政治的・軍事的・經濟的利用操作と、金・元等異民族支那支配の先行諸時代への歴史的反省と、並びに滿洲民族主義の昂揚と相俟つて少數異民族にして良く三百年の支那支配を可能にしたのであり、(第二講、異民族統一と外交・貿易)そして又、この歴代主權者の個人的な智的優秀性が、天主教師を通じて西洋文明を攝取理解する事を得しめ支那文化への耽溺の契機を薄めて之を客觀し得る精神的餘裕を獲得せしめたのであつた。(第三講、外國文物の輸入)斯る優れたる智性の保持者たりし歴代主權者が文化政策に優れたる手腕を示せしは寧ろ當然であつて、對滿不穩思想に對しては徹底的彈壓を、穩健にして非實踐的なる學究に對しては豪勢なるパトロンとして立ち現れ、指導階級たる讀書人の思想動向を巧みに操つて清朝政權の安定を策したのであつた。斯くして彼等讀書人の唯一の哲學たる「經學」に反映せる思想動向は、初期に於ける明代の主潮たりし〃宋學〃の蹈襲より、やがて彼等の清朝政權への迎合を示して御用學的色彩濃厚なる〃漢學〃の盛行を見せ、末葉、主權者の絶對性の否定につながる思潮たる〃宋學〃が再び勃興して彼等の清朝政權よりの離反を示してゐる。(第四講、經學)「史學」に於ては近世的な實證精神に貫かれたる考證主義を主潮とするに至り、「文學」に於ては八股文を退けて古文の復興と駢體文の流行とを見、やがて兩者の止揚を跡づけしむるのであり、「詩」に於て「書」に於て又「繪畫」に於ては、初期に於ける明末の傾向の蹈襲より復古的傾向に轉じ、やがて巧緻・粹和・清楚の極を行くダンティズムを展開し、末期に至り骨力と沈實とを加へると云ふ如き大體に於て同一の流潮を跡づけしむるのである。斯る文化流潮の變轉が近世支那社會經濟の變遷に對應せしものたりし事は勿論であるが、支那近世史上空前とも云ふ可き絢爛たる文化の開花期を將來せし要因は清朝主權者の文化的性格に依るものであつたと云ふ可きであらう。(第五講、史學及び文學・第六講、藝術)(以上「清朝史通論」)斯くして清朝の支那支配は一應の安泰を將來したのであつたが、少數異民族を基體とする王朝なるが故にその支那支配は

第一に軍事的優秀性に基礎づけられたものでなければならなかつた。然るに八旗兵の軍事的優秀性なるものは實は多分に傳說的假評なりし事、歷史的には實は絕對的なるものではなく、當に漢民族の軍事能力の消長に對應しての相對的優秀性に止まれるものなりし事が次第に暴露せられるに至り、遂に髮賊の亂を契機として漢人を自衞に蹶起せしめ滿人の軍事的自立性は殆んど全く喪失せられて清朝支那支配の第一の基礎は崩壞するに至つたのである。（第一講、兵力上の變遷）一方財政面に於ては、端的なる節儉政策に依つて齎されたる豐潤なる國庫蓄積も、中葉以降國事漸く多端に、末期對外賠償累積するに及んで全く空缺を告げ、又異民族王朝なるが故に意識的に反復强調しなければならなかつたゼスチュアー的「善政」としての廣汎なる免賦も、官僚の中間搾取に逢つては空しきポーズとしてのみ止まり、財政經濟面に於ても亦末期的症狀を展開するに至つた。（第二講、財政經濟上の變遷）而も他面外國勢力の壓迫に依て覺醒せられし民族意識は排滿思想に轉化發展し、御用學的〃漢學〃は衰退し、〃宋學〃思潮は孔子崇拜より更に讀書人自身に身近なる存在たる諸子の崇拜へと、彼等の自我の主張を依托せしめて一層の發展を示し、西歐共和主義思想の影響漸く顯著なるものあり、清朝政權の理論的基礎亦崩壞するに至つたのである。（第三講上、思想上の變遷）かくして清朝政權は革命思想の攻勢の前にやがては崩壞す可く運命づけられて居るものと想定せられるものがある。（第三講下、結論）〔以上「清朝衰亡論」〕

以上が本書の概要であるが、本書二篇は共に時間的制約の下に發表せられたる講演である爲め、そこに盛られたる博士の蘊蓄はコンデンスにコンデンスを加へられし精粹そのものであり、精粹の極、博士の蘊蓄の深淵よりの必然的展開なるを解し兼ね間々理論的飛躍を覺えしむるもの無しとせず、又挿話的凸凹も少からず、本書を概要する事は極めて困難である。然し乍ら只、本書が清朝時代を『支那近世史の普遍性と異民族支配てふ特殊性の交錯せる時代。』更に云へば『近世』と『民族意識』てふ二つの歷史概念を以て貫き編まれてゐる事のみは斷言し得よう。ともあれ我々は博士の齎されたるこれ等偉大なる成果を「ドグマ」として只徒らに墨守する事なく、眞に「古典」として歷史の中に正しく把握す可きであらう。（A5四二三頁・東京弘文堂書店發行・定價六圓四五錢）（眞島行雄）

西洋史說苑——昭和十七年度——

京都帝國大學西洋史研究室編

京大西洋史研究室に於いては、曩に故時野谷當三郎教授の還曆記念に際し、研究室關係者一同の西洋史論文を集めて『西洋史說苑』を編し故博士に獻呈し、親意を表したのであるが、本書は、それに引續き、同じく研究室關係者の諸勞作を集めて成つたもので、原隨園教授を中心に一致協力、西洋史學研鑽につとめつゝあるその學的努力の成績である。時局に伴ふ出版界の事情で上梓の豫定が遲れはしたが、收むる所の論文は十八篇の多きに達し、何